

# 基礎科学分野にある閉塞感について思うこと

大隅良典\*

今、大学の基礎科学分野が抱える深刻な問題について私見を述べたい。第一は大学院生を巡る問題であろう。基礎生物分野では博士課程に進学する学生が著しく減っている。特に理学部では顕著になってきており、若い人の絶対数の減少を考えると事態はますます深刻化するに違いない。この最大の要因は将来を見通せない点に尽きるだろう。ポストの定まらない先輩達の姿を見ると不安になるし、進学は無謀だという警告も発せられる。これに対して大学人もほとんど説得するすべを持たない。現在、若い研究者への奨励策がとられているが、これも実際には底上げにはつながらない。学振のDCの採択が博士課程へ進学するか否かの判断材料になってしまう。一部のエリート達を早くから引き上げる制度は、逆に若者の選別を促し裾野の拡大にはつながらない。まだ実績もないときの選別は残酷で、決して若い人たちに夢を与えてはいない。

第二にその背景に若い世代が確実に保守化していて、短絡的に“役に立つ”ことを目指したいという傾向が強くあることも見逃せない。一見して役に立たない基礎的なことを尊ぶ精神は恐ろしく減退している。我々自身も研究費の申請書類に研究の波及効果などを書かされることに段々抵抗を感じなくなっているように思う。さらに画一的な評価制度がこの現象に拍車をかけている。誰もがインパクトファクターの矛盾を感じていながら、その呪縛は大きい。学術雑誌が商業主義に陥り、こぞってIFの数値に踊らされ、画一化、系列化が進んでいる。IFの高い雑誌に掲載することを目指すと自ずと流行を追う傾向を助長することになる。突飛な発想に基づく研究や時間のかかりそうなテーマは敬遠されがちになる。私自身、論文の引用が目に見えるようになるには相当なラグがあることを実感している。基礎研究を基礎研究として評価する制度の確立が肝要であろう。

第三の問題点は研究費の問題である。運営交付金のカットは確実に大学の活力を奪っている。講座費や設備更新費などの経常的経費が削られ、競争的資金とその間接経費に取って代わったために、ますます格差が広がっている。まじめな40代、50代の中堅研究者の研究基盤が脅かされている。大学を中心的に担う中堅層が応募できる研究費の項目に限られ、研究を継続して展開できる展望をもつことが極めて困難になってきている。一方で個人研究を重視することから、大学の共通機器などの充実が図れず、研究の困難さを増していることを考えると、思い切った機器の集中化や共同利用の促進が必要である。個々の装置の総額を考えると、それらを維持するスタッフを雇用する措置がそれほど難しいことではないことが分る。

大学でも様々に説明責任が問われるようになってきているが、逆に我々研究者が研究費や制度設計に関して説明を受ける機会は全く保障されていない。例の最先端研究支援費は言うに及ばず、科研費に関しても、毎年何かが変更されるが、その意図が何であり、何を狙っているかの説明は十分になされない。大学では、様々“やらなければならない事”が膨張し続けている。義務と権利は表裏一体の関係にあることを強く認識して、もっと教育をする権利、研究を進める権利について考えることが大学人に必要ではないだろうか。遠回りに見えるかもしれないが、大学のスタッフ、ポスドク、院生、学生達が率直に生の声をぶつけ、反映させることができるシステムの構築を我々自身の問題として真剣に考えなければいけない時に来ているように思う。

\*東京工業大学統合研究院